



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1920年「学位令」下における女性の学位取得状況
Author(s)	山本, 美穂子
Citation	北海道大学大学文書館年報, 11, 59-73
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61489
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARHUA11_003.pdf



< 研究ノート >

1920年「学位令」下における女性の学位取得状況

山本 美穂子

はじめに

1918年12月6日大学令の公布（翌年4月1日施行）に伴って、1898年12月9日公布の学位令は、1920年7月5日、以下のとおり、改正された¹⁾。

学位令（1920年7月5日公布、勅令第二百号）

第一条 学位令ハ博士トス

第二条 学位ハ大学ニ於テ文部大臣ノ認可ヲ経テ之ヲ授与ス

第三条 博士ノ種類ハ大学ニ於テ之ヲ定メ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第四条 学位ヲ授与セラルヘキ者ハ大学学部研究科ニ於テ二年以上研究ニ従事シ論文ヲ提出シテ学部教員会ノ審査ニ合格シタル者又ハ論文ヲ提出シテ学位ヲ請求シ学部教員会ニ於テ之ト同等以上ノ学力アリト認メタル者トス

第五条 学部教員会ハ前条ノ論文審査ニ付其ノ提出者ニ対シ試問ヲ行フコトヲ得（以下、第六条～第十条、附則は略す）

1920年の改正では、学位授与権は文部大臣から大学に移行し、学位を授与される者は学位請求論文による者（研究科に2年以上在籍して論文を提出して審査に合格した者、または、論文を提出し学位を請求し審査で認められた者）に一本化した。各大学では、「学位規程」を制定して博士号の学位を授与する体制を整え、帝国大学では1921年より、私立大学では1922年より学位授与が行われるようになった。

一方、1898年公布の学位令の下では、1905年7月に眼科医の宇良田唯子が医学博士号の学位請求論文を提出したという報道記事を²⁾、1918年3月及び1919年6月には東京女子高等師範学校助教授の保井コノが博士論文を執筆中という報道記事を確認できるが³⁾、結局、1900～1910年代に女性に博士号の学位が授与されることはなかった。その後、1927年4月20日、前述の保井コノが東京帝国大学より理学博士を授与されたことが嚆矢となり、1920年改正の学位令の下で女性の学位取得者の誕生が続いた。

本稿では、これまで個別の小伝（長島譲『女博士列伝』科学知識普及会・1937年、山下愛子編『近代日本女性史 科学』鹿島出版会・1983年、青木生子・岩淵宏子編『日本女子大学に学んだ文学者たち』翰林書房・2004年等）にとどまりがちであった女性の学位取得

について、1920年公布の学位令が学校基本法により1947年3月末に廃止となるまでを主な対象として⁴⁾、女性の学位取得状況を一覧化し、学位の種別毎に、どのような特色が見られるのか、確認するものとする。

1. 1927～1947年における女性の学位取得状況

1927～1947年における女性の学位取得状況(氏名、学位取得日、出身校、学位授与大学、学位論文題目)を、巻末に一覧として掲げた(【巻末一覧】を参照)⁵⁾。1927年保井コノが理学博士号を取得して以降、1947年までに、理学博士・医学博士・農学博士・薬学博士の理系4種別で、学位取得者が誕生した。

表1 女性の学位取得数(1927～1947年)

年	理学博士	医学博士	農学博士	薬学博士
1927年	1			
1928年				
1929年	1			
1930年				
1931年	1	2		
1932年	1	2	1	
1933年		2		
1934年		3		
1935年		1		
1936年		3	1	
1937年		3	1	1
1938年	1	8		
1939年		6		
1940年	1	7	1	
1941年		10		
1942年	2	11		
1943年		11		
1944年	1	8		
1945年	1	28		
1946年	4	30		
1947年		12		1
計	14	147	4	2

出典 能勢岩吉編『日本博士録』(教育行政研究所、1956年)、
国立国会図書館所蔵学位論文等より作成した。

取得者数をみると、圧倒的に医学博士の数が多い。他の学位種別より医学博士数が多数であるのは、男性と同様である。

なお、文系種別の学位は、戦前期に女性に授与されることはなく、1952年8月8日、近藤いね子（東北帝国大学法文学部1935年卒業・文学士⁶⁾、英米文学者、後に津田塾大学名誉教授）が、“Jane Austen: the development of her art”によって、東京教育大学より文学博士を授与されたのが嚆矢であった。

大学令の公布に伴って、学位令が改正される前年の1919年6月24日付『読売新聞』朝刊4面「婦人講壇」欄には、「専門研究に依らずとも、博士が学術上教育上の功勞を表頌する名誉の称号である以上、博士号を贈与しても善い婦人も二三にして留まらぬかも知れません。例へば津田梅子女史や安井哲子女史などに文学博士の学位を贈つても、誰か不当と認めませう」とあり、海外留学経験や国内における女子高等教育指導者としての功績を鑑み、女子英学塾を創立した津田梅、東京女子大学学監の安井哲などに、名誉学位的に文学博士号を授与させたいと報道した。さらに、1920年代後半からは、東北帝国大学法文学部（1923年設置）、九州帝国大学法文学部（1924年設置）、東京・広島文理科大学（1929年設置）などの一部の大学で、女性の文学士・法学士を輩出してもいた⁷⁾。しかしながら、1920～1940年代に、女性に文系の博士号が授与されることはなかった。

2. 学位種別毎の特徴

1927～1947年にかけて、理学博士（14名）、医学博士（147名）、農学博士（4名）、薬学博士（2名）の女性の博士が誕生した。以下に、学位種別毎に、学位取得者の出身校・専攻などを取り上げ、学位種別毎の特色や相違点、共通点を探るものとする。

(1) 理学博士・農学博士

1927年、女性で初めて学位を取得した保井コノ（女子高等師範学校1902年卒業）は、当時を振り返って、次のように語っている。

〔ハーバード大学で細胞組織学の研究を積んで1916年帰国したが、〕石炭〔研究〕の仕事は、研究費の点から〔勤務先の〕女高師では出来なかった。……〔東京女子高等師範学校の中川謙次郎校長、東京帝国大学の藤井健次郎教授の尽力で、東京帝国大学で〕当時新設された遺伝学講座のお手伝いをすると同時に、石炭の研究を約10年間つづけた。当時女高師には、そのような設備をする費用もなかった……「日本産石炭の植物学的研究」が学位論文になった。これは新しい研究で、日本中どこでもしていなかったもので、教授会で楽に通ったようである（1929）。それで、私は日本で女の博士第1号になった。女だから学位をやれないというような説は、当時でも東大の教授会、少なくとも理学部ではなかったようだが、やはり東大の先生がふみ切って下さったの

だと思う。これがきっかけとなって、他の分野でも女の博士が出るようになった。この時の審査員は藤井健次郎、柴田桂太、早田文蔵の三教授であった。後の両教授とも、通過してよかったですねえ、と喜んで下さった⁸⁾。

「お茶の水女子高師の教務の果て次第、午後四時頃よりこゝ〔東京帝国大学附属植物園内の実験圃〕へ通うて、植物遺伝に就き実地研究」⁹⁾という不屈の生活を、1916～1927年頃まで約12年間も続けて、保井コノが完成させた論文は、「これは新しい研究で、日本中どこでもしていなかった」という学術的な自負のもと、女性初の博士を誕生させるに至った。

1929年には黒田チカが理学博士を、1932年には辻村ミチヨが農学博士を取得し、保井コノに続いた。黒田チカの学位審査要旨には、「有機化学上多大な貢献をなすに至れり」と研究成果を讃え、さらに、「著者の学識及び実験上の手腕は共に理学博士の学位を授与するに充分なるもの」(審査員：化学第二講座担任眞島利行教授、化学第五講座担任野村博教授)と学識・実験技能への評価が記載されていた¹⁰⁾。研究成果、すなわち学位論文の水準の高さが、女性の理学博士・農学博士を輩出する源であり、不可欠な条件であった。

なお、理学博士、農学博士取得者の出身校は、東京女子高等師範学校(前身の女子高等師範学校を含む)が8名と多数を占め、奈良女子高等師範学校とあわせると11名に及んだ(表2)¹¹⁾。「保井コノ子女史を初めとして、黒田、加藤、辻村の各女理学博士は、全部皆女高師出身の人々であつて、女理学博士は女高師と限られてゐた様な感」(『女医界』第228号、1932年3月1日、10頁)と称されるほどであった。

表2 理学博士・農学博士取得者の出身校(1927～1947年)

出身校	人数	卒業後の大学進学者数
女子高等師範学校(理科)、東京女子高等師範学校(理科、理科第二部)	8	5名(理学士3名、全科選科修了2名)
奈良女子高等師範学校(理科)	3	2名(理学士2名)
日本女子大学校(師範家政学部、家政学部第二類)	3	2名(理学士2名、その内 Ph.D. 1名)
大阪府女子専門学校	2	
帝国女子医学薬学専門学校	1	

注 1名は出身校不明。全科選科修了者1名、理学士1名は、後に農学博士を取得した。

また、理学博士・農学博士の各専門は、植物学者(植物遺伝学・細胞学：保井コノ、植物生理学：吉村フジ、植物病理学：本間ヤス)、生物学者(小川文代)のほかは、無機化学・有機化学・物理化学・食品化学・生化学・栄養化学をはじめとする化学者(黒田チカ、辻村みちよ、加藤セチ、丹下ウメ、波多腰ヤス、村田希久、柿田八千代)が大半を占めた。

以上のような特色は、女子高等師範学校の理科(物理、化学、植物、動物)、女子専門

学校の家政学部といった、出身校の教育課程が基盤となり、由来したものである。また、帝国大学において、女性の進学をいち早く認めた学部が、理学部・農学部であったことも背景のひとつであろう。実際に、上記の理学博士・農学博士の女性たちの中には、女子高等師範学校・日本女子大学校卒業後に、東北帝国大学（理科大学・理学部）、北海道帝国大学（農科大学・農学部、理学部）、広島文理科大学に進学した者が9名にのぼる。

表3 新制大学の教官を務めた理学博士・農学博士一覧

大学名	理学博士・農学博士の氏名
お茶の水女子大学	保井コノ、黒田チカ、辻村みちよ（家政学部長）、吉田武子
大阪女子大学	松本静子
北海道大学	吉村フジ、添谷晃子
奈良女子大学	稲葉文枝（理学部長）、波多腰ヤス（家政学部長）
大阪市立大学	村田希久

出典 お茶の水女子大学ジェンダー研究センター編『女性科学者の源流』1989年、CiNii登録論文、各大学沿革刊行物等より作成した。

そして、理学博士・農学博士の学位取得後も、取得前と変わらず、理化学研究所（黒田チカ、辻村みちよ、加藤セチ、染野藤子）や帝国大学（吉村フジ、添谷晃子、保井コノ）の実験設備・研究環境を利用して、研究を不屈に継続した者が多かった。

これらの研究者は、戦後、母校が新制大学に昇格した際、母校の教授や学部長を務めるなど、新制大学としての研究・教育を出発させる重要な担い手となった（表3）。

(2) 医学博士

1931年1月、西村庚子が、東京帝国大学で、女性初の医学博士号を取得した。西村庚子は、東京女子医学専門学校を1921年卒業後、東京帝国大学医学部耳鼻咽喉科や解剖学教室で8年研究に携わり、学位論文をとりまとめている¹²⁾。一方、西村に続いて、1931年10月に医学博士号を取得した井出ひろは、東京女子医学専門学校を1919年卒業後、海外に渡り、シアトルで開業、ウェスター研究所で解剖学を3年研究し、1930年万国解剖学会で論文を発表して帰国した人物であった。東北帝国大学で学位審査した論文は、上記の万国解剖学会での発表論文であった¹³⁾。「従来の例としては、多く外国で論文を作った人は、内地に帰った後何れかの大学教室で、一二年研究の上、此所に於ても副論文の一、二を纏めて提出しないと通過しない様です」¹⁴⁾と、東京女子医学専門学校長の吉岡彌生が述べているように、女子医学専門学校卒業生が学位の取得を目指すのであれば、大学（帝国大学、官公私立大学の医学部・附属病院）で助手・副手・専攻生・介補等として研究に数年従事し、論文を数本執筆して提出するという過程が基本であったと考えられる¹⁵⁾。

その後、医学博士号の女性の取得は、毎年連続した。旧学位令では文部大臣のみが授与できた学位が、1920年公布の学位令により各大学で授与できるようになると、もともと他

の学位より取得者数の多い医学博士は、さらに取得者数が急増していた。医師求人も「医専医学士」(医学専門学校・医学専門部卒業生)、「医学士」(帝国大学・官公私立大学卒業生)に、さらに「医学博士」が加わり、階層区分が明確化され、医学教育の二元化の結果が顕著となっていた¹⁶⁾。そのような中で、「医学博士」の学位は、男性同様、女性たちにも、臨床医(開業医あるいは勤務医)としてのキャリアに、有為な職業的資格であったに違いない。

なお、医学博士取得者の出身校は、表4のとおりである。東京女子医学専門学校(1912年設立)が63.9%を、帝国女子医学専門学校(1925年設置、1930年帝国女子医学薬学専門学校と改称)が24.5%を占め、女子医学教育と女性の医師界を牽引していた二大女子医専が占めた。

表4 医学博士取得者の出身校(1927～1947年)

出身校	人数
済生学舎、私立日本医学校	2
栄養学校	1
東京女子歯科医学専門学校	1
東京女子高等師範学校	1
大阪女子高等医学専門学校	11
帝国女子医学専門学校、帝国女子医学薬学専門学校	36
東京女子医学専門学校	94

出典 1名は出身校不明。巻末一覧より集計した。

(3) 薬学博士

薬学博士2名は、東京帝国大学より1937年学位を授与された鈴木ひでる(日本女子大学校教育学部第一部1910年卒業)と、1947年に授与された堅田真佐(帝国女子医学薬学専門学校卒業)である。いずれも、専門学校で化学を修学し、卒業後には鈴木は専攻生(1921～1926年)として東京帝国大学医学部薬学科(薬理学第二講座)の近藤平三郎教授より指導を受け¹⁷⁾、堅田は同講座で落合英二教授より指導を受けて¹⁸⁾、薬化学研究に従事している。堅田真佐の学位取得後の経歴は不詳であるが、鈴木ひでるは母校日本女子大学校の教授を1929～1944年まで務め、後進の育成にあたった。

1930年以降、帝国女子医学薬学専門学校のほか、東京女子薬学専門学校、昭和女子薬学専門学校など、薬学分野を有する女子専門学校が増加したが、薬剤師の養成が基盤であった¹⁹⁾。実験室の設備・学術文献の装備は、帝国大学医学部に比することはできず、薬化学研究に従事できる環境・処遇は限られていたためか、医学博士のような学位取得者の増加は薬学博士にはみられることはなかった。

むすび

1929年11月24日、東京女子高等師範学校同窓会の櫻蔭会は、黒田チカ（同校教授）の学位授与祝賀会を、学士会館で開催した。当日、席上で、理学博士 保井コノ（同校教授）は、次のとおり、自他を戒めつつ、「どし―博士になつていたゞきたい」と、後輩たちを激励した²⁰⁾。

何故かうして喜ばなければならないかと考へると一寸情ないやうな気もする。外国では女で学位を得たとて、人々は日常の事と思つてゐる。自分も一昨年不束な身を以て学位を得たのであるが、時には之を貰つたが為に窮屈で厄介だと思ふこともあるが外国との関係上などからドクターでないと不便な事もあつたりするので、とにかく論文を出したのである。……学位を有するものが少数だと厄介を感じたりするのであるから、若い人達は折角勉強してどし―博士になつていたゞきたい。

女子高等教育機関を卒業後、女性の職業は主に教職・医業に限られていた当時の状況下で、女性が学位を取得するというのが、各自のキャリアに対してどのような効果・作用をもたらしたのか、あるいは、出身校である女子高等師範学校や女子専門学校にとって、大学昇格運動や新制大学での大学院設置運動へと連なつて、その後、どのような作用・影響をもたらすのかを解明することは、今後の課題としたい。

〔注〕

- 1) 『北海道帝国大学一覧 皇統三十二年』(1923年、65～67頁)を参照。
- 2) 「女子の学位請求」、1905年7月5日付『読売新聞』朝刊、5面。同記事は、「熊本県宇土の人浦田唯子ハ眼科に関する論文を呈出し医学博士号を請求せり 我国に於て女子の学位請求ハ同女史を以て嚆矢とす 女史ハ先きに独逸マルブルグ大学に遊びドクトルの学位を授けられたり」と伝えた。宇良田は済生学舎修業後、1905年2月ドイツで医学博士を取得し、同年4月帰国、東京府神田区連雀町で眼科医を開業していた（ドクトル宇良田唯子「開業広告」・1906年9月8日付『読売新聞』朝刊・6面、上村直己「マルブルグ留学時代の宇良田唯子」・熊本大学文学会『文学部論叢』第75号・2002年3月・29～54頁、岡村良一「明治三十八年にドクトル・メディツィーネを取得した牛深出身の女医——宇良田タラの生涯」・『熊杏』第44号・1999年5月・160～169頁を参照）。
- 3) 「保井女史の遺伝畑」（1918年3月14日付『読売新聞』朝刊、4面）、「保井この子女史が博士論文の起草」（1919年6月23日付『読売新聞』朝刊、4面）、「女博士の出現」（1919年6月24日付『読売新聞』朝刊、4面）。
- 4) 1920年公布の学位令による学位授与は、学校基本法第94条の規定で廃止となったが、第108条「従前の学位令による学位は、第九十四条の規定にかかわらず、第九十八条の規定による大学において、文部大臣の定めるものの外、なお従前の例により、これを授与することができる」との規定により、学校基本法施行の際に存続していた大学では、従前の通り学位を授与することができた。1947年4月以降、旧制学校出身者より学位請求論文の提出は相次ぎ、旧制学位の授与は1962年まで続いた（学校基本法は『北海道大学一覧 昭和二十七年』1953年、28～35頁を参照）。本稿では、1947年4月以降の

- 女性の学位取得状況の調査が継続中のため、ひとまず、1947年までを対象とすることとした。
- 5) 能勢岩吉編『日本博士録』(教育行政研究所、1956年)、国立公文書館所蔵「学位授与認可」、国立国会図書館所蔵学位論文をもとに作成し、『大学一覧』、『女医界』、長島譲『女博士列伝』(科学知識普及会、1937年)等により補った。巻末一覧は、出身校・氏名より女性であると確定できた人物を一覧化しているが、大学出身者で氏名より性別の判定が困難な場合(留学生等)があったことは否めず、巻末一覧の完成度を高めることは今後の課題である。
 - 6) 『東北帝国大学一覧 昭和十四年度』(1939年、594頁)を参照。
 - 7) 拙稿「北海道帝国大学へ進学した東京女子高等師範学校卒業生たち」、『北海道大学大学文書館年報』第6号、2011年3月、54～55頁。
 - 8) 保井コノ「初の女性博士となるまで」、『自然』第18巻第9号、1963年9月、50～51頁。
 - 9) 前掲「保井女史の遺伝畑」。
 - 10) 「黒田チカ提出学位請求論文「カルサミンの構造に就て」審査要旨」、簿書「学位15 東北大学」、東北大学史料館所蔵。
 - 11) 理学博士・農学博士取得者は、出身校や進路など重なる場合が多いため、表2にまとめて示した。
 - 12) 『女医界』第213号(1930年12月1日、5・7頁)、前掲『女博士列伝』20～29頁。
 - 13) 前掲『女医界』第213号(7頁)、前掲『女博士列伝』52～59頁。
 - 14) 吉岡彌生「近況随筆」、『女医界』第222号、1931年9月1日、6頁。
 - 15) 例えば、帝国女子医学専門学校卒業生で最初の医学博士取得者である葛西ともは、1932年卒業後、直ちに北海道帝国大学医学部の内科学第一講座の副手となり、有馬英二教授のもとで約6年間副手を勤めて研究をし、1938年7月に北海道帝国大学より医学博士を授与されている(「帝国女子医専出身最初の女医博士」、『日本女医会雑誌』第86号、1938年9月、12頁)。
 - 16) 拙稿「北海道帝国大学の専攻生制度について」、『北海道大学大学文書館年報』第9号、2014年3月、33～34頁。
 - 17) 「帝大の専攻生に初めて婦人の入学 鈴木けん子さんの令妹で丹下女史の秘蔵弟子」(1921年5月11日付『読売新聞』朝刊・4面)、日本女子大学理学教育研究会編『日本女子大学叢書13 女子理学教育をリードした女性科学者たち』(明石書店、2013年、99～124頁)を参照。
 - 18) 堅田真佐の学位論文(国立国会図書館関西館所蔵)の緒言を参照。堅田は、1942年、落合英二教授がpyridine N-oxideのニトロ化に成功したことから、落合教授指導の下で、N-オキシド基の特異性を比較研究している。
 - 19) 『文部省年報』を参照。
 - 20) 『櫻蔭会会報』第120号、1929年11月30日、2頁。

〔後記〕 本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)の交付による研究成果の一部である。

(やまもと みほこ／北海道大学大学文書館員)

【巻末一覧】 1927～1947年における女性の学位取得状況

理学博士					
	氏名	学位取得日	出身校	学位授与大学	学位論文題目
1	保井 コノ	1927.4.20.	女子高等師範学校(理科)	東京帝国大学	日本産亜炭、褐炭及瀝青炭の構造研究
2	黒田 チカ	1929.11.4.	東京女子高等師範学校(理科)→東北帝国大学理科大学化学科(理学士)	東北帝国大学	カルサミンの構造に就て
3	加藤 セチ	1931.6.26.	東京女子高等師範学校(理科)→北海道帝国大学農科大学(全部選科修了)	京都帝国大学	アセチレンの重合
4	陶 慰孫	1932.7.6.	東京女子高等師範学校(理科)聴講生	京都帝国大学	米澱粉の生化学的研究
5	小川 文代	1938.4.5.	奈良女子高等師範学校(理科)→東北帝国大学理科大学生物学科(理学士)	東北帝国大学	蚯蚓の生長時に於ける神経系に就いて
6	松本 静子	1940.10.9.	大阪府女子専門学校	京都帝国大学	成熟せる蜜柑の生化学的研究
7	染野 藤子	1942.4.30.	不明	京都帝国大学	脂肪属アルコール類の熱分解とその燃焼機構
8	吉田 武子	1942.6.10.	東京女子高等師範学校(理科)→東北帝国大学理科大学化学科(理学士)	東北帝国大学	アンモニアと二酸化炭素との反応動力学
9	稲葉 文枝	1944.7.6.	奈良女子高等師範学校(理科)→広島文理科大学(理学士)	京都帝国大学	コマユバチの遺伝的研究
10	村田 希久	1945.5.5.	日本女子大学校(師範家政学部)	大阪帝国大学	ビタミン B ₁ のジアゾ反応に就て
11	吉村 フジ	1946.2.15.	東京女子高等師範学校(理科)→北海道帝国大学理学部植物学科(理学士)	北海道帝国大学	浮萍科植物の栄養並びに発育生理学
12	三井 早苗	1946.4.15.	大阪府女子専門学校	大阪帝国大学	大豆の酵素に関する研究
13	添谷 晃子	1946.8.21.	日本女子大学校(家政学部第二類)→北海道帝国大学理学部物理学科(理学士)	北海道帝国大学	乱流流動場に於ける固体壁よりの熱伝達について
14	柿田 八千代	1946.9.3.	帝国女子医学薬学専門学校	東北帝国大学	砒素の定量分析法の研究
農学博士					
	氏名	学位取得日	出身校	学位授与大学	学位論文題目
1	辻村 みちよ	1932.6.8.	東京女子高等師範学校(理科) ※北海道帝国大学農学部農芸化学科(副手)	東京帝国大学	緑茶の化学的成分に就て
2	本間 ヤス	1936.5.4.	東京女子高等師範学校(理科第二部)→北海道帝国大学農科大学農業生物学科(全部選科修了)	北海道帝国大学	日本産ウドンコ菌科
3	波多腰 ヤス	1937.5.4.	奈良女子高等師範学校(理科)	京都大学	鯛に関する栄養化学的研究
4	丹下 ウメ	1940.8.14.	日本女子大学校→東北帝国大学理科大学化学科(理学士)	東京帝国大学	ビタミン B ₂ 複合体の研究

医学博士					
	氏名	学位取得日	出身校	学位授与大学	学位論文題目
1	西村 庚子	1931.1.8.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	邦人聴器の形態学的研究
2	井出 ひろ	1931.10.3.	東京女子医学専門学校	東北帝国大学	人間男性の正中並びに坐骨神経の横断面に現はれたる人種に関する種々の特徴に就て
3	福井 繁	1932.4.30.	済生学舎	大阪帝国大学	胎盤物質注射による人工黄体発生時に於ける家兎卵巣の黄体の死滅卵及び間質腺の計測的観察
4	中村 身加栄	1932.5.27.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	卵巣ホルモン及び所謂脳下垂体前葉ホルモンと子宮運動 月経来潮、妊娠持続調節、分娩発来の機転
5	吉原 リユウ	1933.2.1.	東京女子医学専門学校	東北帝国大学	エンテロコクセンの研究
6	竹内 茂代	1933.8.3.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	日本女子の体質に関する研究
7	戸田 クニ	1934.5.22.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	動物体に於けるコリンの分裂
8	三條 かの	1934.7.31.	東京女子医学専門学校	京都帝国大学	虹彩色素上皮細胞純培養に就ての薬物学的研究
9	越智 シゲル	1934.8.31.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	吸虫類の被囊幼虫並びに發育史に関する研究
10	佐藤 イクヨ	1935.6.24.	東京女子医学専門学校	九州帝国大学	粘液性連鎖球菌に由る前額竇炎及び前額竇炎性脳膜炎の実験的研究
11	浅野 ハル子	1936.5.27.	東京女子医学専門学校	大阪帝国大学	白色葡萄球菌性膿疱疹(土肥氏)病原菌に関する研究
12	岡本 さかき	1936.9.14.	東京女子医学専門学校	京都帝国大学	所謂悪性腫瘍毒素の副腎、淋巴系統、其他一、二の器官に及ぼす影響に関する生物学的研究
13	押田 草子	1936.11.16.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	消化管粘膜の抗原透過性「慣レ」に就て
14	安川 八重	1937.3.27.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	冷却ロイマチス実験的補遺
15	田嶋 阿や子	1937.11.2.	東京女子医学専門学校	大阪帝国大学	邦産蟾蜍に於ける聴器の発生学的研究
16	竹沢 さだめ	1937.11.8.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	先天性股関節脱臼整復後の順応的变化に就て
17	守屋 千代野	1938.1.20.	東京女子医学専門学校	岡山医科大学	陰極線の家兎肝臓に及ぼす影響並にX線作用との比較研究
18	小川 ミヤコ	1938.2.7.	東京女子医学専門学校	大阪帝国大学	ラッテ子宮上皮の細胞学的研究
19	赤坂 サナミ	1938.4.18.	東京女子医学専門学校	九州帝国大学	脚気心に関する実験的研究
20	風間 たね	1938.4.18.	私立日本医学校	日本医科大学	色素性母斑の組織学的研究
21	山本 杉	1938.6.23.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	人工気胸のレントゲン学的研究
22	葛西 とも	1938.7.6.	帝国女子医学専門学校	北海道帝国大学	人工気胸の心臓分時血流量に及ぼす影響に関する研究
23	養内 照子	1938.8.4.	東京女子医学専門学校	京都帝国大学	家兎体内諸臓器に於ける家鶏血球の運命に就て特に甲状腺の影響
24	前田 トモヨ	1938.10.10.	東京女子医学専門学校	大阪帝国大学	眼畸形の実験的研究

	氏名	学位取得日	出身校	学位授与大学	学位論文題目
25	龍 智恵子	1939.1.16.	帝国女子医学専門学校	東京帝国大学	実験的血行性結核の経過に及ぼす微量の異種細菌の影響
26	許 世賢	1939.6.15.	東京女子医学専門学校	九州帝国大学	エルゴタミンの薬理 特に腸管に対する作用
27	中村 範子	1939.6.30.	東京女子医学専門学校	大阪帝国大学	母体の栄養が仔児の胃形態、胃組織の発育に及ぼす影響に就て
28	奥谷 みさ	1939.8.1.	帝国女子医学専門学校	東京帝国大学	生体の抵抗力及細菌性発熱に及ぼす異種細菌の影響に関する二、三の実験的研究
29	高辻 マサエ	1939.8.28.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	魚類網膜における視細胞特にその排列状態について
30	湯本 アサ	1939.9.14.	東京女子医学専門学校	名古屋帝国大学	女子の身体発育に及ぼす職業の影響
31	三神 美和	1940.3.4.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	不飽和脂肪酸の動物栄養に及ぼす影響
32	長崎 たき	1940.3.9.	東京女子医学専門学校	熊本医科大学	抗酸性菌の解離について
33	矢崎 光子	1940.3.28.	東京女子医学専門学校	京城帝国大学	血色素の特異性に関する疑義
34	吉井田 鶴子	1940.4.13.	帝国女子医学専門学校	東京帝国大学	インフルエンザ菌百日咳菌及びリン菌による発熱に対する微量の各種異種細菌の影響
35	亀田 歌子	1940.7.22.	東京女子医学専門学校	九州帝国大学	白鼠の発育に関する実験補遺
36	福田 昌子	1940.7.22.	東京女子医学専門学校	九州帝国大学	妊娠時血液尿及臓器のヒスタミン含量の増加並其の機転について
37	野中 トメ	1940.8.2.	東京女子医学専門学校	大阪帝国大学	発ガン過程における発情物質の意義
38	富士村 佐代子	1941.3.22.	東京女子医学専門学校	北海道帝国大学	組織内微生物の一証明法に関する考察並に夫れのトラコーマ性組織内微生物に関する実験に就て
39	大塚 阜	1941.4.4.	東京女子医学専門学校	長崎医科大学	窒息の研究
40	佐々木 アヤ子	1941.4.4.	東京女子医学専門学校	長崎医科大学	チロジン酵素に関する研究
41	藤川 富慈子	1941.4.7.	帝国女子医学専門学校	大阪帝国大学	Abrin の生化学的研究
42	三神 秋子	1941.4.16.	帝国女子医学薬学専門学校	東北帝国大学	分極方法による胃粘膜液測定について
43	大山 文路	1941.4.16.	帝国女子医学薬学専門学校	東北帝国大学	胃液中ノ結核菌培養証明ト其ノ臨床的意義
44	中前 テル	1941.5.24.	帝国女子医学薬学専門学校	熊本医科大学	日本人眼における毛様体の解剖学的研究
45	安澄 静枝	1941.7.5.	東京女子医学専門学校	大阪帝国大学	眼球の静電氣的荷電について
46	本多 喜美	1941.7.28.	東京女子医学専門学校	日本医科大学	赤色骨髓の病理組織学的研究
47	小泉 和	1941.12.3.	東京女子医学専門学校	東北帝国大学	Typhus 菌々体成分の免疫学的研究
48	飯淵 かをる	1942.1.20.	帝国女子医学専門学校	東京帝国大学	発疹チフス感染海狸の白血球像殊に単核球の形態学的研究
49	千葉 静子	1942.1.26.	大阪女子高等医学専門学校	京都帝国大学	超短波の胃運動に及ぼす影響について

	氏名	学位取得日	出身校	学位授与大学	学位論文題目
50	立野 君子	1942.2.4.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	日本女子の体質に関する研究
51	小松 寿子	1942.4.13.	帝国女子医学薬学専門学校	北海道帝国大学	痘毒のマウス脳通過によるNeurovaccine への転化
52	松源 致貞	1942.6.18.	東京女子医学専門学校	京城帝国大学	墓血管中脳に関する薬理学的研究
53	福岡 玲伊	1942.7.6.	帝国女子医学専門学校	東京帝国大学	男女性ホルモンの作用機転について
54	牛島 百合子	1942.7.23.	帝国女子医学薬学専門学校	東京帝国大学	諸種有機酸 Alkylamid の薬理学的研究
55	中西 清子	1942.8.5.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	土壌より分離せる破傷風菌の生物学的並に免疫学的研究
56	福田 文江	1942.8.15.	帝国女子医学薬学専門学校	千葉医科大学	山羊乳栄養の研究
57	沖津 久良	1942.9.4.	帝国女子医学専門学校	京都帝国大学	超音波抗原に関する研究
58	西富 久恵	1942.10.27.	帝国女子医学薬学専門学校	熊本医科大学	実験的動脈硬化症と内分泌障碍とくに血漿及び血球脂肪の形態学的研究
59	横山 恒子	1943.2.9.	東京女子医学専門学校	大阪帝国大学	Arginase作用に関する研究
60	財満 鈴	1943.2.13.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	百日咳臨床知見補遺
61	田中 孝子	1943.2.16.	大阪女子高等医学専門学校	京都帝国大学	培養組織によるコカイン習慣作用の検討
62	二之宮 千代	1943.2.26.	東京女子歯科医学専門学校	慶應義塾大学	レ線ならびに赤線赤外線放射の家兎血液像に及ぼす相互作用に就て
63	小林 ちよ	1943.3.20.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	C型質に関する研究
64	良田 圭子	1943.5.6.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	抗体の胎盤通過性ならびに初乳における抗体に就て
65	芳村 マサエ	1943.7.1.	大阪女子高等医学専門学校	京都帝国大学	肝障碍がアルゼノベンゾール剤の生体内運動に及ぼす影響
66	宮城 二三子	1943.7.1.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	脳幹の内部構造に関する比較解剖学的知見補遺
67	野見山 シツエ	1943.7.27.	東京女子医学専門学校	九州帝国大学	河豚毒に就ての薬理学的研究
68	大畠 捨子	1943.11.27.	東京女子医学専門学校	東北帝国大学	哺乳動物中枢神経系統の比較解剖学的知見補遺
69	大西 リユウ	1943.12.27.	東京女子医学専門学校	大阪帝国大学	クルローフ氏小体に関する研究
70	池田 珠	1944.1.12.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	肺炎に関する研究
71	大野 春江	1944.1.24.	東京女子医学専門学校	千葉医科大学	「パーキンソニスムス」の輻輳開散能力に就て
72	吉岡 薫	1944.4.13.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	超極大刺激による筋収縮残遺に就て
73	足立 智恵子	1944.5.5.	帝国女子医学専門学校	東京帝国大学	日本人女子体格の計測的研究
74	小林 テツ	1944.7.31.	東京女子医学専門学校	東北帝国大学	「ヒヨンドロゲン」の研究
75	山中 和江	1944.10.7.	東京女子医学専門学校	大阪帝国大学	「ビタミン」B各成分の結核患者尿「ウロクロモゲン」並に「ウロビリン」に及ぼす影響に就て
76	芦沢 菊枝	1944.10.15.	東京女子医学専門学校	北海道帝国大学	女性骨盤形態の發育に関する「レ」線学的研究

	氏名	学位取得日	出身校	学位授与大学	学位論文題目
77	佐山 楓	1944.12.23.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	ヴィールス細菌に及ぼす色素の光力学的作用
78	山田 倫子	1945.1.30.	大阪女子高等医学専門学校	九州帝国大学	アルコールの結核に及ぼす影響に関する実験的研究
79	八木 ヤツ	1945.2.19.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	牀中毒ニ関スル研究
80	松村 鐵子	1945.2.19.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	子宮癌に於ける中性嗜好白血球と其の臨牀的意義
81	大西 寿子	1945.2.19.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	成熟新産児ならびに早産児における胃腸の「レ」線学的研究
82	大原 一枝	1945.3.2.	大阪女子高等医学専門学校	京都帝国大学	再發生落屑性顔面紅皮症について
83	岡本 糸枝	1945.3.23.	東京女子医学専門学校	大阪帝国大学	皮膚 Allergie の研究
84	安西 港	1945.4.11.	東京女子医学専門学校	長崎医科大学	腸チフス菌におけるV1抗原の研究
85	宮地 国栄	1945.4.12.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	産婦人科領域における保存血輸血の研究
86	青木 良枝	1945.5.2.	東京女子医学専門学校	北海道帝国大学	毛髪成長に関する実験的研究
87	新井 正江	1945.5.9.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	A型の亜型(A ₁ , A ₂)に関する研究
88	上田 美笑子	1945.5.16.	大阪女子高等医学専門学校	京都帝国大学	各種脊椎動物の毛細血管及動脈の内径と構造に関する研究
89	桜岡 幾代	1945.7.8.	東京女子医学専門学校	東北帝国大学	種々なる荒川氏反応を呈する乳婦の母乳の血液及尿中のクロール含量に就て
90	米山 一枝	1945.7.9.	帝国女子医学薬学専門学校	新潟医科大学	哺乳類気道の比較発生学的研究
91	遠藤 ハナ	1945.7.9.	不明	新潟医科大学	細菌毒素による萎縮性鼻炎の実験的研究
92	光藤 百合子	1945.7.10.	東京女子医学専門学校	長崎医科大学	各種実験的黄疸に於ける血清並びに淋巴の緑色蛍光体—主としてウロビリノーに関する研究
93	久保田 奈美代	1945.7.11.	帝国女子医学薬学専門学校	新潟医科大学	婦人科開腹手術患者の皮膚温度研究
94	松岡 数江	1945.7.12.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	骨組織再生機転におよぼす Antimon の影響
95	竹中 翠江	1945.7.17.	大阪女子高等医学専門学校	大阪帝国大学	超音波の破傷風毒素に及ぼす影響について
96	徐 駿英	1945.9.8.	帝国女子医学専門学校	京城帝国大学	ゲルトネル腸炎菌毒による組織転調に関する知見補遺
97	洪 閏玉	1945.9.8.	東京女子医学専門学校	京城帝国大学	甲状腺ホルモンの反覆注射後に観る拮抗性物質の産出に就て
98	松川 吉江	1945.9.8.	東京女子医学専門学校	京城帝国大学	肝「デストマ」症による脾臓変化に就いて
99	小川 喜代子	1945.9.26.	大阪女子高等医学専門学校	京都帝国大学	酒石酸ニコチンの白鼠性週期並びに体重に及ぼす影響及びV.B ₁ , V.B ₂ (Lactoflavin) との関係に就て

	氏名	学位取得日	出身校	学位授与大学	学位論文題目
100	佐々木 伴子	1945.9.29.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	アレルギーとしてのニワトリ胚芽血管現象の研究
101	守屋 マサ	1945.11.10.	帝国女子医学薬学専門学校	東北帝国大学	連理草の血糖降下作用に就て
102	高橋 キヨ	1945.11.26.	東京女子医学専門学校	名古屋帝国大学	高温時汗及尿による塩化物の排泄
103	野原 利	1945.11.26.	帝国女子医学薬学専門学校	名古屋帝国大学	高原気候の生体諸機能に及ぼす影響の研究
104	久保田 くら	1945.11.27.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	人舌糸状乳頭上皮の研究 特に角化とケラトヒアリンとに就て
105	伯井 律	1945.11.29.	帝国女子医学専門学校	大阪帝国大学	胎生後半期における邦人胎児腎小管に就て
106	山野 稚木	1945.11.29.	帝国女子医学専門学校	大阪帝国大学	邦産蟾蜍 <i>Bufo vulgaris</i> に於ける脳の発生に就て
107	鬼頭 阿佐夫	1946.12.27.	東京女子医学専門学校	大阪帝国大学	大脳皮質クロナキシーに関する研究
108	窪 敦子	1946.2.12.	東京女子医学専門学校	九州帝国大学	喉頭ポリープの研究
109	和田 せつ	1946.2.12.	東京女子医学専門学校	九州帝国大学	小児の肺炎性脳膜炎における脳病理
110	小野江 いはほ	1946.2.15.	東京女子医学専門学校	北海道帝国大学	超短波の家兎脳髄ビタミンCに及ぼす影響に就いて
111	鶴澤 とも	1946.2.15.	東京女子医学専門学校	北海道帝国大学	二種の異なる神経親和性病毒の感染並びに免疫成立上の差異に関する実験的研究
112	吉江 常子	1946.2.28.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	A B O式血液型分布より観たる世界民族
113	吉田 文子	1946.2.28.	東京女子医学専門学校	九州帝国大学	喀痰中の結核菌の生存並びにその変異菌株に関する研究
114	板橋 順子	1946.3.12.	東京女子医学専門学校	日本医科大学	屍体肺臓のレントゲン学的並に病理解剖学的比較観察
115	本間 ムツ	1946.4.15.	東京女子医学専門学校	新潟医科大学	新化学治療剤プロミンについて
116	富田 美耶子	1946.4.15.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	脂肪代謝に及ぼす副交感神経の影響に就て
117	梅沢 菊枝	1946.5.10.	帝国女子医学薬学専門学校	東京帝国大学	都市乳幼児発育規準に関する研究
118	小林 龍野	1946.6.5.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	コレステリン添加食後の未知不飽和物質について
119	添田 百枝	1946.5.20.	帝国女子医学薬学専門学校	東京帝国大学	<i>Leptospira icterohaemorrhagiae</i> の免疫に関する研究
120	岩隈 智恵子	1946.6.5.	帝国女子医学薬学専門学校	九州帝国大学	ネズミチフス菌大量死菌免疫に関する実験補遺
121	陳 桂子	1946.6.17.	帝国女子医学薬学専門学校	台北帝国大学	水蛇 (<i>Enhydra plumbea</i> Boie) に於ける肝及脾の発生について
122	劉 聰慧	1946.6.17.	帝国女子医学薬学専門学校	台北帝国大学	台湾産毒蛇の家兎肝臓機能に及ぼす影響
123	竹村 利子	1946.6.27.	帝国女子医学薬学専門学校	京都府立医科大学	輸血の血小板機能に及ぼす影響
124	菊嶋 助野	1946.8.21.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	乳幼児栄養失調に関する臨床的研究

1920年「学位令」下における女性の学位取得状況（山本）

	氏名	学位取得日	出身校	学位授与大学	学位論文題目
125	河野 林	1946.8.21.	帝国女子医学薬学専門学校	日本医科大学	脳回転萎縮の病理学的研究
126	二階堂 昌子	1946.9.13.	帝国女子医学薬学専門学校	東京帝国大学	出血時間に関する研究
127	阿部 八重子	1946.9.13.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	鳥類眼扇状体(Pecten)の発生学的研究補遺
128	近 暁 呂	1946.10.15.	帝国女子医学薬学専門学校	日本医科大学	鶏卵の脾液分泌に及ぼす影響について
129	西山 喜代子	1946.12.18.	東京女子医学専門学校	東京帝国大学	ハイネ・メデン氏病臨床知見捕遺
130	藤井 千枝子	1946.12.19.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	Glutamin 酸ナトリウムの皮質性てんかん物質化について
131	人見 俊子	1946.12.19.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	ツベルクリン反応の研究
132	川村 糸子	1946.12.19.	東京女子医学専門学校	日本医科大学	本邦小児の手部形態について
133	村田 達江	1946.12.19.	帝国女子医学薬学専門学校	日本医科大学	橈骨動脈の病理学的研究
134	前田 いね子	1946.12.19.	帝国女子医学薬学専門学校	名古屋帝国大学	実験的銅中毒における肝臓の変化について
135	田原 マチ	1946.12.20.	大阪女子高等医学専門学校	大阪帝国大学	実験的脊髄前角炎猿における脊髄神経節の病理組織学的研究
136	千島 チエコ	1947.1.6.	帝国女子医学薬学専門学校	大阪帝国大学	粘液水腫性侏儒の精神医学的研究
137	川中子 げん	1947.2.17.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	子宮腺上皮の細胞学的研究
138	浅利 てつ	1947.2.17.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	ビタミン B ₁ に関する研究
139	桑原 くめ	1947.3.31.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	白鼠腹腔内に接種せる細菌の運命並に其の組織学的所見について
140	加藤 正子	1947.4.9.	東京女子医学専門学校	名古屋帝国大学	発癌性物質による気管壁の組織変化及び可移植性動物腫瘍の気管壁内移植実験
141	福岡 文子	1947.4.10.	栄養学校	北海道帝国大学	カタラーゼ作用の賦活に関する研究
142	和田 富起	1947.4.10.	東京女子高等師範学校	北海道帝国大学	味噌の養価と味噌仕込方法の栄養学的検討
143	池松 静香	1947.4.30.	帝国女子医学薬学専門学校	熊本医科大学	眼科領域におけ赤外線感光色素(虹波)の応用
144	齋藤 三津子	1947.6.26.	大阪女子高等医学専門学校	京都帝国大学	培養白血球の形態的变化に関する薬理学的研究
145	村野 喜代	1947.7.3.	東京女子医学専門学校	京都帝国大学	超音波の色素に及ぼす影響について
146	坂井田 いづみ	1947.7.11.	大阪女子高等医学専門学校	京都帝国大学	人および哺乳動物の脳脊髄液排導淋巴管系
147	阿部 歌子	1947.11.18.	東京女子医学専門学校	慶應義塾大学	小脳性散瞳ならびに散瞳反射に関する研究
薬学博士					
	氏名	学位取得日	出身校	学位授与大学	学位論文題目
1	鈴木 ひでる	1937.1.12.	日本女子大学校	東京帝国大学	レモンゼン揮発油成分ベリレン Perillen の構造研究
2	堅田 真佐	1947.11.18.	帝国女子医学薬学専門学校	東京帝国大学	ピリデン-N-オキシドに関する研究

出典 能勢岩吉編『日本博士録』（教育行政研究所、1956年）、国立国会図書館所蔵学位論文等をもとに作成し、『女医界』、『日本女医会雑誌』、『女博士列伝』、『大学一覽』等より補った。